



Fly to the wild  
2005

コウノトリの放鳥という歴史的な瞬間とともに

# 「第3回 コウノトリ未来・国際かいぎ」を開催

テーマ 「人と自然が共生する持続可能な地域づくり」



平成17年9月24日、5羽の飼育コウノトリが豊岡の秋の空へと放たれ、コウノトリの野生復帰へ新たな一歩が刻まれました。1965年の人工飼育の開始から40年という長い時間を経て、夢の実現へまた一歩進んだのです。

また放鳥と併せ、豊岡市ではコウノトリ野生復帰への課題や方向性を国内外の方と一緒に考えるため、9月24日、25日の2日間にわたり、県・市共同で「第3回コウノトリ未来・国際かいぎ」を開催しました。

「人と自然が共生する持続可能な地域づくり」をテーマに国内外から約2,500人が参加し、基調講演や分科会を通して意見交換を行い、今後の進むべき方向性等をメッセージとしてまとめて、採択しました。



全国各地から多くの人参加

9月24日、第3回コウノトリ未来・国際かいぎの会場となった豊岡市民会館文化ホールには、朝早くから大きなかばんやカメラ、三脚を持った人、双眼鏡を首から提げた人などが詰めかけました。多くの参加者で埋め尽くされたホール内は、午後からのコウノトリの放鳥という歴史的な瞬間も見ようという人が多く、シンポジウムは熱気を帯びていました。

## 全体会

「かいぎ」は、山岸 哲実行委員長の開会宣言により始まりました。1994年に開



会場内には双眼鏡を持った人が多く見られた

催した第1回の国際かいぎにもご臨席いただいた秋篠宮殿下から「海外からの研究者を含め、鳥類や自然環境保全に携わる関係者が一堂に会し、研究発表、意見交換を行いながら、人と自然が共存する持続可能な地域づくりについて考えていくことは、大変意義深いことであると思います」とのおことばがありました。その後、県立コウノトリの郷公園の増井光子園長から放鳥までのコウノトリの保護・増殖の経過報告が行われました。基調講演では、コウノトリ野生復帰の意義、自然環境との共生について、貴重な報告や提言がありました。（概要は次ページに掲載）

## ◎メッセージを いただきました

(敬称略)

友田英彌

(元但馬コウノトリ保存会総務部長)

コウノトリを絶滅から救おうと、人間の英知を絞ってスタートさせた人工飼育。国際的な支援が今日の自然放鳥につながりました。コウノトリの保護事業に携った多くの方に感謝します。

吉井 正(財)山階鳥類研究所顧問

絶滅の瀬戸際に追い込まれた鳥を救う一つの手段として始まった保護増殖でしたが、さまざまな困難を一つひとつ克服して、本日、放鳥する段階にきたのは、豊岡の人たちの頑張りがあったからだと思います。

松島興治郎(元コウノトリ飼育長)

ようやく本日のコウノトリの放鳥が迎えられたのは、たくさんの人たちが、コウノトリの復活を応援し、支えてくれたからです。長い道のりがこれからあります。今まで以上によりよくお願いします。

キャサリン・キング

(オランダ・ロッテルダム動物園)

この威厳あるコウノトリを日本に復帰させる理想が現実となるこの機会に再び豊岡の地を訪れ、フォーラムに参加でき、光栄です。



タイトルの「よみがえれ野生のいのち」には、2つの意味があります。1つは、絶滅したものをよみがえらせる。もう1つは、絶滅しそうなるものをよみがえらせることです。そして、2つ目の意味が特に大切で、コウノトリ放鳥というこの日に、考えるきっかけになれば幸いです。

日本全体の生物を視野に入れて、何からやらなければならぬかを考える時期にきています。

### 「よみがえれ野生のいのち」 山岸 哲(財)山階鳥類研究所所長)

コウノトリ、トキを含めて15種の鳥を私たちは日本から失い、地球上ではこの400年間に128種の鳥を同じように絶滅させています。また、鳥だけでなく植物、ほ乳類、は虫類、魚など多くの種が絶滅するだろうと危惧されており、

### 国内外のさまざまな方から報告、提言をいただきました (敬称略)

#### 経過報告

「コウノトリの保護増殖の現状と未来」  
増井光子(県立コウノトリの郷公園園長)

#### 基調講演

「よみがえれ野生のいのち」  
山岸 哲(財)山階鳥類研究所所長)

「エコロジーだけが経済を救う」  
フランツ・アルト(ドイツ・ジャーナリスト)

#### 分科会

第1分科会「コウノトリの野生復帰を検証する  
- 生息地外保全から再び生息地内保全へ -」

座長 池田 啓(兵庫県立コウノトリの郷公園研究部長)  
発表者 マイケル・ウォーレス(アメリカ・サンディエゴ動物園)、キャサリン・キング(オランダ・ロッテルダム動物園)、朴是龍(韓国・国立教員大学コウノトリ復元研究所長)、山岸 哲(山階鳥類研究所長)、長谷川 博(東邦大学教授)、羽山伸一(日本獣医畜産大学助教授)、大迫義人(県立コウノトリの郷公園主任研究員)

第2分科会「生きものと共生する農業(安全安心なお米づくり)」

座長 保田 茂(兵庫県農漁村社会研究所代表、神戸大学名誉教授)  
発表者 金種淑(韓国・韓国農業専門学校教授)、稲葉光國(NPO法人民間稲作研究所代表)、呉地正行(日本雁を保護する会会長)、磯 悦喜(コウノトリの郷営農組合長)、田中香代子(食と農懇話会世話人)、西村いつき(兵庫県豊岡農業改良普及センター普及主査)

第3分科会「環境と経済が共鳴するまちづくり」

座長 中瀬 勲(兵庫県立大学教授、前豊岡市環境経済戦略策定委員会委員長)  
発表者 フランツ・アルト(ドイツ・ジャーナリスト)、今泉みね子(環境ジャーナリスト・ドイツ在住)、小浦久子(大阪大学大学院助教授)、小西孝則(豊岡商工会議所、前豊岡市環境経済戦略策定委員会委員)、中田裕美子(前豊岡市環境経済戦略策定委員会副委員長)

第4分科会「世界へ、未来へ、次世代へ」~コウノトリ子どもがいびき~

座長 ケビン・ショート(アメリカ・東京情報大学教授、ナチュラリスト)  
発表者 柳生 博(日本野鳥の会会長、コウノトリファンクラブ会長)、永田 萌(イラストレーター、文化庁文化審議会専門委員)、ロシア・ハバロフスクの子ども、宮城県田尻町立大貴小学校、新潟県佐渡市立行谷小学校、豊岡市立小坂小学校、豊岡市立三江小学校

### 「エコロジーだけが経済を救う」 フランツ・アルト(ドイツ・ジャーナリスト)

1日に地球上から100種ほどの動植物が絶滅しています。1日に30,000ヘクタールが砂漠化しています。1日に26,000の人々が食糧難で亡くなっています。飢餓と気候破壊、現在の社会が抱えている大きな問題は、同時に自身の生活基盤も破壊

この問題の解決方法の1つの手段は、エネルギーの問題です。エネルギーの問題は、我々の将来を占う一番のカギです。エネルギーなしでは生命は維持されません。エネルギーなしでは、経済も動きません。石油などの化石エネルギーは、今から10年の間に普通の人では買えない値段に上がってしまい、こ



れから先、数十年で枯渇の時を迎えます。ということは、従来型のエネルギーの使用は地球温暖化や種の絶滅といった環境問題だけでなく、実は大きな経済問題を抱えています。我々は、エコジカル(自然的)な市場経済を確立しなければなりません。

ウラジミール・アンドロノフ

(ロシア連邦天然資源省  
極東環境管理副局長)

関係者の目的と前向きな姿勢があつて、40年もの間、目標とされたゴールを追い続けることができた。ロシアでは屋根の上のコウノトリは世界に平和をもたらすと言われていました。多くのコウノトリが私たちの家や地域に住むようになれば、幸せが訪れると思います。

マイケル・ウォーレス

(アメリカ・サンディエゴ動物園)

今日の放鳥にとどまらずこれから野生のコウノトリが自然の中で増殖することを願ってやみません。私もアメリカでカリフォルニアコンドルの野生化に挑戦してきました。これからも一緒にがんばりましょう。

守山 弘(東京農業大学客員教授)

人間と環境をトータルとして扱って、人の暮らしや文化を全てひっくるめて研究をする「地域まるごと博物館構想」作成の仕事をさせていただきました。その構想はコウノトリの野生復帰によって実行段階に入ったといえます。コウノトリの野生復帰を成功させた豊岡の皆さんのお力で、博物館構想も成功させてください。

2日目の25日は、「コウノトリ」、「農業」、「環境と経済」、「子ども」という4つのテーマの分科会を開催し、報告、意見交換を行いました。

### 第1分科会

コウノトリの野生復帰を検証する」

コウノトリとの共存が具体的に変わった今こそ、冷静に検証したいとの趣旨のもとに開催された分科会では、豊岡における野生復帰事業は環境の分析、計画の策定、環境整備等の UCN（国際自然保護連合）のガイドラインに従って取り組んできたことが報告された。

また、繁殖技術と飼育技術放鳥方法の確立、ボランティアの協力などによって、成功しているカルフォルニアコンドルの野生復帰の例や電線、



繁殖地の減少、餌の減少などの脅威の除去が課題となっているヨーロッパコウノトリなどの海外事例も報告された。この報告を受け、コウノトリ野生復帰事業を、住民・NPO、企業・各種団体、学者、行政の間での継続的な協議によって推進していかねればならない。また、ロシアや韓国で取り組まれているコウノトリの保護・増殖との異なる国際協力が必要である」と確認された。

### 第2分科会

生き物と共生する農業

～安全安心なお米づくり～

日本や韓国の環境創造型稲作や豊岡における「コウノトリ育む農業」の取り組みを、生産者、流通関係者、消費者を交えて話し合いを行った。

報告の中で、「コウノトリが暮らせる環境をつくるためには、生産者が環境創造型農業に転換していける農業技術の改善が必要であり、その取り組みに挑戦する生産者を、消費者や流通関係者に支えてほしい」との意見が出された。



また、韓国の事例でも「親環境農業である有機農業が活発な地域では、地域のリーダーを中心に伝播や教育を通して意識転換があり、それに共感した消費者たちが地域に親しみを覚え、交流を続けている」との報告があった。議論の末、生き物と共生する農業は、単なる物作りに終始しない物語性を持った取り組みであり、生産に直接関係しない生き物、風景といったものを私たちに見直す機会を与えてくれる。その象徴的なものがコウノトリであり、コウノトリが暮らせる環境を取り戻すことは、私たちも、次の世代も、健康に暮らせる環境をつくりあげることである。生き物と共生する農業が豊岡から全国に広がっていくことを期待する」とまとめられた。

### 第3回 コウノトリ未来・国際かいぎ

採択メッセージ

『人と自然が共生する』

持続可能な地域づくりに向けて』

私たちは、コウノトリ野生復帰への取り組みが進むこと兵庫県豊岡市で、3日目の『コウノトリ未来・国際かいぎ』を開催しました。

特に今回は、『かいぎ』開催中に飼育下コウノトリの最初の放鳥が実施され、コウノトリが人里にいたことが現実となったことで、議論はより具体的なものとなりました。これまで進めてきた内容を検証し合い、新たな課題を提示し合って、それぞれの取り組みが持続可能となるよう、討議を深めました。

私たちは、この『かいぎ』で、食物連鎖の頂点に立つ大型の鳥・コウノトリでも住める豊かな環境は、私たち人間にとつて豊かな自然・文化環境であることを、改めて確認し合いました。そして、そのような環境づくりを揺るがないものとするために、『かいぎ』参加者がそれぞれ立場で行動するとともに、連携し、支え合っていくことを確認しました。

このコウノトリ野生復帰の取り組みが、人と自然が共生する持続可能な地域づくりの一つのあり方となるよう、私たちは、今回の討議を踏まえ、この『かいぎ』の名において、国内外の人々に次のとおりメッセージを発します。



池上加奈子さんがメッセージを朗読。池上さんは、11年前に開催された第1回『かいぎ』に地元小学校児童の一人として参加していた

環境と経済が

共鳴するまちづくり

海外からの報告として、環境先進国であるドイツのさまざまな環境への取り組みは、市民が自らできることから始めた、「小さな市民の力」の成果であった。環境に良いことを持続させるには経済的に成り立たないといけない」と提言があった。

また、環境と経済を循環させるために重要なことは、豊岡の風土に合ったまちをデザインすることやコウノトリと共に暮らす豊岡型の暮らしを進めていくことが大切である」との意見が出た。

最後は、「豊岡の風土や文化・歴史に、グローバルな視点を加え、新しい技術を導入することで、コウノトリも住める豊岡の循環型のまちづくりを進めていける」と今後のテーマが示され、「市民と行政の意識改革と環境と経済の共鳴がそれを可能にする」と総括された。



世界へ、未来へ、次世代へ  
コウノトリ子どもかいき

コウノトリは田んぼやため池など日本の生活文化の中で生きていた。コウノトリが住める環境を復活させることは、文化や暮らしも一緒に復活させることである。そのためには、どういふ地球で生きていきたいか、子どもたちに考えてもらいたい」との話で始まった分科会は、ロシア（コウノトリの保護活動）、宮城県田尻町（蕪栗沼のガンなどの観察と学習）、新潟県佐渡市（トキの野生復帰）、そして、地元豊岡の子どもたちが参加した。

子どもたちは、それぞれの活動の成果を発表し、三江小学校の児童は、コウノトリの学習を通して「いのち」のつながりを考え、また、小坂小学校の児童は、昨年の台風23号による被災体験を通して自然との共生のあり方について考えたことを発表した。

発表を通じ、子どもたちが環境に関心を持ち、深く学習していることに、今後の活動と取り組みの輪が広がることが期待された。



午後からは、兵庫農漁村社会研究所代表の保田 茂さんを総括者に、各分科会の報告と総括が行われました。

また、「かいき」のフィナーレには、コウノトリファンクラブ会長の柳生博さんが参加。10年前の『第1回かいき』で出会った子どもたちなどと共に参加者全員で「翼をください」を合唱し、これからの取り組みの輪の広がりや誓い合い、放鳥されたコウノトリの無事と野生復帰の成功を祈りました。



1 コウノトリを野生で定着させるには、カリフォルニア、アコンドルやヨーロッパコウノトリなどの例になら、ロシア、韓国などの国際協力を一層活発にし、持続可能な地域社会を実現することこそが不可欠であるとの認識に立って、これからも長い期間にわたって努力を続けよう。

2 私たちは、地域の多様な資源を生かした循環型農業に取り組み、農薬や化学肥料をできるだけ使わず、夏の中干しを延期したり、冬季には水を張るなど、水田を生物の生息場所として最大限に機能させ、生きものと共生できる農業を進めよう。そして、生産者と消費者が共に手を携えながら、コウノトリを育む安全で安心なお米作りをこの地域に広げ、コウノトリと共に暮らすことのできる健康で安心な生活環境を創造しよう。

3 環境に負荷を与えない取り組みが経済効果を生み、さらにその経済効果が環境をより一層良くしていく仕組みを各地でつくっていきこう。そのために、具体的な成功事例をたくさんつくり、環境と経済が共鳴し合う「まち」を目指そう。

4 子ども想像力や感動する心は、魅力的な自然をよみがえらせる原動力でもある。自然や生きものに触れる場を多く作り、子どもの感性をより豊かにしよう。そして、国内外の交流を通して、さらに取り組みの輪を広げていこう。

以上のような取り組みが、それぞれの立場で展開され、地域に活力が満ちたとき、人と自然が共生する持続可能な地域をつくりあげることができると確信します。  
私たちは、行動を続けます。皆さん、一緒に行動しましょう。

詳しい内容については、年度末にまとめる報告書でお知らせします。